

20世紀欧米と日本の美術解剖学史

加藤 公太^{1,2)}, 岡村 太郎¹⁾, 坂井 建雄¹⁾¹⁾ 順天堂大学大学院医学研究科 解剖学・生体構造科学, ²⁾ 東京藝術大学大学院美術研究科 美術解剖学

19世紀西洋の美術解剖学では、フランスとドイツが中心であり、美術学校では古代ギリシャの人体彫刻をモデルにした解剖図が用いられ、人体描写と体表解剖学を結びつけた教育が行われていた。これに続く20世紀の主なムーブメントには、フランスの流れを継承してアメリカで発展したものと、19世紀から続くドイツの系譜がある。

20世紀初期のフランスの美術解剖学では、フランス国立高等美術学校の解剖学教授リシェ (Richer, Paul Marie Louis Pierre. 1849–1933) の『新編美術解剖学1–6巻』(1906–29) やリシェの教え子であったモロー (Mreux, Arnould) による『人体の美術解剖学』(1928) が主に用いられた。国立高等美術学校で学んだカナダ人画家のブリッジマン (Bridgman, George Brandt. 1865–1943) は、フランスの教材と教育法をアメリカへと持ち帰り、ニューヨーク美術学生連盟の素描クラスにおいて、短時間での人体構造把握を目的とする即興的な描画方法を編み出した。ブリッジマンの『構造的解剖学』(1920) に見られる解剖図は、隅々まで観察することを目的とせず、学習者に伝えたい肝要な部分のみを抽出して素早い筆致で描かれている。これはクロッキー (速写画) と解剖図を組み合わせた斬新な手法で、その後の体験型講座における教育法の主流になった。元メトロポリタン美術館の学芸員ヘイル (Hale, Robert Beverly. 1901–1985) はブリッジマンの後任となり、その教育法を継承した。ヘイルは、リシェの大著『美術解剖学 人体の外形と解説』(1890) の英訳版 (1971) を出版し、美術解剖学の世界的な普及に貢献した。

ドイツにおける20世紀の美術解剖学は、19世紀末に活躍したフロリープやコルマンを出発点として、初期のモリール (Mollier, Siegfried. 1866–1954)、中期のタンク (Tank, Wilhelm. 1888–1967)、後期のバンメス (Bammes, Gottfried. 1924–2007) と連続性が見られる。ミュンヘン大学解剖学・組織学教授モリールは、芸術家ではなく医師であったが、自分の解剖体験と研究に基づいて骨格と筋のシェーマを描き、簡易で視認性の高い図を描いた。モリールのシェーマはその後のドイツ系美術解剖学書によく引用された。中期にはベルリン美術学校の美術解剖学教授タンクが『形態と機能 一つの人体解剖学 1–5巻』(1953–57) など多数の著作を残した。タンクの図版は、アメリカで主流となっていた素描的な解剖図と対照的に隅々まで解剖学的構造が丁寧に描写され、観察して理解すべきものとした。後期に活躍したドレスデン美術学校の解剖学教授バンメスは1957年から続く研究の集大成として『人の形』(1969) を出版した。本書は現代的な美術解剖学書として最も網羅的な書籍で、2002年の10版まで増補され続けた。この書籍にはモリールのシェーマやタンクの精細な図、ブリッジマンの素描など様々な描画方法とそれに基づく教育内容が取り入れられている。

20世紀日本の美術解剖学は、芸術学と融合し、美術作品の解析研究を含む学問として発展した。東京美術学校における美術解剖学は、久米桂一郎 (1866–1934) が教鞭をとったのち、西田正秋 (1901–1988) に引き継がれた。東京美術学校は西田の在任中に東京藝術大学へと改称し、美術解剖学は芸術学科に配置され、名称は「人体美学」へと改称した。これにより日本の美術解剖学は、芸術家のための解剖学だけでなく、人体表現を取り扱う芸術学の学術研究も含まれるようになる。西田の研究は、美術作品を解剖学的に論じ、その美的要素を明らかにする試みであった。西田の退官後は中尾喜保 (1921–2002) が引き継ぎ、名称は美術解剖学に戻された。東京藝術大学の美術解剖学研究室は、現在も芸術学科の研究室として存続し、西田から始まった芸術学的な側面が維持されている。